



No. 4 April 1987

◎ 新入生に与う

読書のすすめ

岡部 喬

新入生のみなさん、入学おめでとう。競争試験の勝利者であるあなた方に、私も人並みに称賛の言葉を送ります。皆さんのこれまでの何年間という努力の成果は報いられ、御自身も満足されていることでしょう。皆さんの周囲の方々の協力や気遣いも大変なものだったでしょう。このような言葉があなた方に向けられる世間の慣用となっている常套句です。今後、大学に入学されて聞かされる言葉は大体次のようなものでしょう。“これからあなたを一人前の大人として遇しましょう” “良い友人に恵まれて大学生活をエンジョイしなさい” “これから好きな勉強が出来ますよ” “4年間は長いようで短いですよ” “そのため一日一日を大切にしてください” これらの助言に素直に従って行けば、確かに充実した学生生活を送れるに違いありません。皆さんを待ち受けている私にしても、年々新たな気構えで今年こそは充実した講義をと意気込んで準備している次第であります。それなのに一年後には多くの満ちたりなさをもって講義を終えなければなりません。その原因は当方にありと信じ続けて28年間、これが初めて二度とない辛口の助言を一外国語教師として皆さんの門出に送りたいと思います。

私の警告めいた助言の対象は、大学に入ったら遊ぼうと思っている人達です。こういう人達が多数派を占めると教室の雰囲気は下降するばかりです。でたらめな発音をまかり通し、単語も憶えなければ、文法の骨組みもい加減な情けない状態でも平気な顔をしている人達を相手にしては、手のつけようありません。安逸に流れると、頭脳もメンタリティも退歩するばかりです。折角、大学に入ったからには生涯を賭けて追い求めるに値するほどの対象を発見すべく努めてみたいと思いませんか。図書館の膨大な蔵書の中で、あなた方の情熱をかきたてるに足る書物に出会えない筈はありません。本はただ読むだけでは眼の前を通り過ぎるにすぎません。読書している時、人は著者の論旨なり、情感なりを懸命に理解しようと追い求めます。その後で、これはおかしくないかと疑問を持つのが「学問の始め」なのです。学問には反芻が必要です。これが疑問を生みだし、疑問の連続が学問を形成していくと言って過言ではないでしょう。そして、ヴォルテールの“書物が書物を生みだすのだ。”という言葉が実感として体得できる筈です。人は誰でも、何冊かの良書に必ず巡り会えるものです。そうした本を読了した後で図書館のラウンジで頭を休め、やがて反芻に移り、友人にどうしても語りたいたいという意欲が湧いてくるでしょう。これが本当の読書と言えるものです。他に例をとると、コンサートで演奏が終わった途端、“ブラヴォー”の叫び声を挙げる輩は世間の習わしに従っているにすぎません。真の感動を味わった後は一瞬、物が言えない状態になるのが普通でしょう。優れた書物を読んで、感動から反芻への過程を経なければ、自ら追求する対象が定まり、真剣な錬磨の切っ掛けが掴め、やがて意欲的な持続性が生まれてくるに違いありません。

目

次

- | | | | |
|------------------------------------|---|-----------------------|---|
| ・読書のすすめ…………… | 1 | ・「四月病」と読書—極私的の古典体験—…… | 5 |
| ・附属図書館—総合大学の原点…………… | 2 | ・特殊文庫目録の刊行について…………… | 6 |
| ・利用者の声…………… | 3 | ・研究会・講習会参加記…………… | 7 |
| ・論文作成のために図書館を
どう利用するか?—自然科学編—…… | 4 | ・係の紹介 雑誌係…………… | 8 |
| | | ・日誌・その他…………… | 8 |

外国語の修得についても同じようなことが言えます。とおり一遍の理解では記憶の表層に留まるのみでやがて水の泡のように消えてしまいます。心の基層にまで達する記憶でなければ定着しません。そのためには、文を音読してリズムを体得し、記憶し、忘れ、また憶える。この繰り返しを持続する以外に上達の方法はありません。書物は言葉という伝達の道具を介して作られ、染められています。道具が使えるまで、今一度頑張ってください。これが私の切なる願いです。

(おかべ たかし 教養部フランス語 教授)

❁ 新入生に与う

附属図書館—総合大学の原点

村松幹夫

明治以来の日本国は、先進学術情報をその起原中心と言うべき欧米から、卓越した効率をもって導入し、日本固有の体系の中へ組み込み、定着せしめた。それは巨視的に見るとき、学術情報の集積地からの水平方向の移動と伝達である。今日の日本は、かつての無償導入の代償として、世界人類にとって有益な何かを独自に産出し、送り出すよう求められるまでになった。学術情報の起源 (Source) の一方的探究のみでなく、自らも独創的に何かを起原 (Originate) せしめねばならない。これらのいずれにも附属図書館は、多大の役割を果たしている。

私は昭和30年代前半に、米国のある州立大学の博士過程の院生として、学術情報の産出中心に辿りついていた。もちろん学術情報が、無償で転がっているはずはない。むしろ、図書館の利用に関し、越え難いと思うほどの異種カルチャーの差を感じた経験がある。それは収蔵書籍数や設備ではなく立派な建築でもない。大体、私には欧米各地の教会や塔など石の建築はそぐわない。画一的な公園や花壇は、多様性を好む私には潤いがなく、過度に広い街路は味気ない。そのような外観の大学図書館も学問権威の象徴と映り近づき難かった。しかし、講義や研究指導を通して、多くの教授のみならず学生達からも、図書館を利用する自己の責任における勉学と研究を強く教えられたものである。その結果、初め気乗りしなかった米国図書館には、実は考えていた姿とは異なり、米国学生達の若く明るい活気に満ちた雰囲気があり、勉学と健全な交流の場が、毎日午前から夜半過ぎまでその内外に展開し、学生達は学問とのまた友人同士との出会いの場として、図書館を位置付けていることを間もなく認識し、図書館の在り方に強い感銘を受けた。ところで、私の専門分野は遺伝学であり育種学である。専門の主要な研究課題以外にも、興味を持つ課題が沢山あり、それらを余暇の利用として図書館で気楽に調べてみることにした。そのうち新大陸起原のある主要栽培植物について、未だに未解決の近縁野生種の発見を手がけることを思い立った。図書館書庫における19世紀以前からの豊富な資料について、知りたい事柄を疑問の続くまま、または恣意的に自然科学を越え、人文社会系の資料も棚から選びだし、必ず目を通すことにした。もちろん専門外の外国語の書籍の内容の理解は高くはならないが、思わぬ興味を持つものがある。私は人類学、特にアメリカインディアンのそれに限りない興味を抱き、今もその通りであるが、とって何らかの集中したStudyを続けたわけではない。しかし、自己の能力の限界の彼方に無限に展開している魅力的な学問分野の大平原の存在を実感するのは楽しいものである。またこのような恣意的な拾い読みの繰り返しから、欧米人の持つ考え方が私の視界に広がり、更に英語圏やスペイン語圏の世界の広がりや深さを感じるようになってきた。各専門分野や各言語圏における有能な研究者による高い業績があり、膨大なそれらを有効配置する図書館の仕事があり、このことに当時私は強い印象を受け、最大の敬意を払う気持ちになった。そして今も変わらない。やがて、私はただ一人でメキシコ東海岸のカリブ海海浜にいた。熱帯の8月の日も眩むような酷暑の海岸で、目指す未解決の植物系統の1つを手にしたのである。あの頃からすでに久しく、幾歳月も過ぎた。植物系統は公式に日本国へ導入し、今、農林省や他大学や岡山大学にもある。興味つきない現代的な研究材料として、専攻生たちの研究材料の一部である。

総合大学の附属図書館には種々の異なる学問分野の一次資料が多数収蔵され、学術情報の莫大な宝庫がある。それらを私達は有効利用し、無限の素晴らしい可能性を各自で引きだそうではないか。独創的研究と成果は、先進国日本の進路と使命である。図書館への学術情報の蓄積は絶えることなく、常に若さと活気ある図書館には完結がない。附属図書館こそ総合大学の前提であり、そこから教育と研究が具体的展開をする原点であると位置づけられる。

(むらまつ みきお 農学部 教授)

留学生の見た図書館

■留学生と図書館 Hunja Murage

岡山大学の図書館は、日本人学生のために建てられたものなので、そこにある本はすべてではないにしろ、ほとんど日本語で書かれたものです。中国や韓国以外の国から来る大部分の留学生は漢字を理解しません。彼らは研究の為、本が必要な時、どこか他の所から手に入れなければなりません。

図書館の洋書は、数が少ない上に古いものが多いので、ほとんど利用できません。新しい出版物や役に立つと感じられる本は、たいてい大学中にちらばった教授や先生の所に集められています。留学生はそのような本を借りるため、めんどろな手続きをするよりも、必要とする本を買った方が良いと感じます。しかし、日本で洋書を買うのは難しく、コストがかかります。

雑誌・ジャーナルに関しては、図書館には主要なものほとんどがあり、大変役に立ちます。

しかしながら、留学生の直面する問題は、「利用できる本はどれか?」「どこに必要な本があるか?」が、なかなかわからないことです。英語で書かれた図書館案内等のパンフレットを新しく来た留学生すべてに配っていただけると大変ありがたいです。

(フンジャ ムラゲ 農学部育種学研究室 ケニア留学生)

■図書館を利用して 王 美 莉

岡山大学の図書館は、学生たちによく利用されているようです。私もよく利用しますが、気づいた点を書いてみたいと思います。

まず、最初に、図書館の人は留学生に対しても親切にしてくれる。と言っておきたいと思います。わからない事を尋ねてもすぐに教えてくれます。また、パソコンを使っているため、借り出すときにあまり待たされることがありません。そして、本がきちんと整理されているので書名・著者名での分類カードにより調べた番号をすぐに見つけることもできます。

しかし良い点ばかりではありません。

①新刊が読めない。

古い本が多い。比較的新しい本もありますが、新聞広告や書評で見つけた話題の本・最新刊は見あたりません。手続きに時間がかかるのでしょうか。先生方が購入された本を学生にも利用させていただければ、かなり新しい本を読むことができると思います。図書館で本を購入する際に、学生の希望図書も採り上げてください。

②開館時間

図書館を利用できる時間を延長してください。授業は5時過ぎまでですが、その後でまとまった勉強をするには8時まででは短かすぎます。10時までにしてもらえると、十分勉強できると思います。

③コピーの利用

大学院生は院生の予算にコピー代を設けているのでカードを与えられています。このカードによるコピーを図書館のコピー機でもできるようにしてもらえば、コピーをするたびに本を持ち出す手間が省けます。

④教養娯楽の図書

専門書以外の本を充実させてほしいと思います。話題の小説も読みたいですし、個人では買えない画集・写真集(1万円以上もしますから)などは度々通ってでも見たい気がしますこれらは間接的に勉強に役立つことでしょう。

⑤漢字圏以外の国々からの留学生のために、案内図・説明書きなどに英語でのInstruction が必要だと思います。

その他、持ち出し禁止になっている本がたくさんある、書庫が暗い、床の足音が気になる、ビデオを観れるような視聴覚教室がほしい、などといろいろありますが、これまで述べてきたことは、不備な点というよりも、今まで十分に利用価値のある図書館をより魅力的なものにするための要望とでも言うべきものです。検討をお願いします。

(ワン メイリイ 経済学部大学院 台湾留学生)

論文作成のために図書館をどう利用するか？～自然科学編～

大森普爾

このテーマで原稿依頼をされたが、当然学生のために書けということと理解して書いてみる。ただし具体的な図書館利用法は、依頼原稿の範囲ではとても書けないので、その為には後述の講義か私の作ったテキストブックを参考にさせていただきたい。ここではその概論と図書館運営の背景を書いてみる。

まず、利用目的。(1)作業仮設に基づき研究開始をするとき、余程特殊な場合を除き、世界中で過去現在において誰かが同じような研究をしているものであり、この分野での戦況と戦闘法を知った方が良い。(2)勿論研究続行中においても上記のことが必要となり、その上研究が試行錯誤・紆余曲折して前進する時、過去の研究手段や新しい理論・方法を採用しなければならない。今更言及する必要もないが、自然科学は他の論文・情報手段の上に成立する。(3)研究が終了したときその成果は、論文や特許になる。この際 Introduction で研究の動機を、Discussion では他の論文・特許の比較検討がなされなければならない。上記(1)、(2)、(3)の理由により情報が必要となり、そのために図書館通いと語学力が必要となる。

次に、情報収集について。今から25年くらい前までは情報収集にはそれ程苦労がなかった。しかし現在の情報は、夜、街灯を背にして歩く時の人影の如く歩く方向に延びてゆく。例えば化学の情報増加率は指数関数的であり、戦前のそれは前年比6.5%、戦後は9.1%だそうである。また、地球上に産まれる新化合物は最近3年間に100万の割である。大変恐ろしいことであり困ったことである。このことを図書館を運営する人や利用者が、まず認識しなければならない。つまり、文部省・図書館・大学教育は自然科学に関するかぎり図書館に対して革命的・抜本的に対処しなければならないのである。しかし、残念ながら現状は、本の単価は上昇しているも、ここ10年来学生一人当たりの図書購入費は上昇していないし、図書館職員も増えていない。むしろ減少している。国家は真面目に国家百年の計を建てているのか、本当に研究教育を重要視しているのかと問いたくなる。例えば現在、私の研究の附属図書館での満足度(すぐほしい本が読めるか)は15%位であり、鹿田分館でのそれは65%位である。従って35%の読みたいが読めない本の内の大切なものだけを参考調査係の御手を煩わして、不便をしのいで他大学より

そのコピーを入手している。次にこのような現状を嘆くだけでは仕方がなく、利用者はどのようにそれに対処しなければならないか、又は、ならなかったかという点について理解していただきたい。

(その1)昭和40年代の初め、例えば Chemical Abstracts は、各学部で購読していた。津島キャンパスではこのような重複購入図書を一本化しそのために浮いた本代で未購入図書を購入手、多少不便でもそれらの図書を一箇所に置こうという構想が出来た。この運動は昭和45年に薬学部より「化学情報センター設置についての要望」という型で津島キャンパスに協力を求め同意を得て出発した。この構想は文部省の支援もあり今日に至っている。ほぼ同じように鹿田分館でもこの型で運営されるようになってきている。(その2)津島キャンパスには生化学関係が一番の古参雑誌 Hoppe Seyler がないので私は自費購読している。同様に薬学部では数人の教官が岡山大学で購読していない雑誌を個人で取っていて、一定期間の後それらの本は図書室や図書館に納められている。今後、残念なことだが大学図書館の本の充実が大学の手によっては不可能なので、このように各人の身を挺した努力が必要だと思う。出来れば個人購入図書目録を作り相互協力をしたいものだ。

最後に、情報洪水時代にどの様に迷える子羊(学生)を求るか(教育)という問題である。再三私事にわたって申し訳ないが、薬学部では昭和47年より文献調査法入門と言う講義と実習をテキストを使用して実施している。また電話回線によるデータの検索も希望学生に実習して貰っている。

各学部におかれましても学生にこのような図書館利用法、文献調査法を教育される必要があるのではないかと思うのは僭越でしょうか。もし実施されるのであれば、その際小学生にでも話す内容ですが、本は高価で大切であること、読んだ本は順番を間違えないで必ず元に戻すということ(図書館でのマナー)教育していただきたいと図書館へ行く度に思うのです。この稿の最後のほうは学生にとりより教官の方々へお願いするようなものになりました。いずれにしても燃えるような気持ちで大学関係者全員が図書館の情報センターとしての一層の充実と発展を計ろうではありませんか。良い図書館がなくては、良い研究、教育は現今では出来ません。

(おおもり しんじ 薬学部 教授)

特殊文庫目録の刊行について

昭和62年3月に、『業合文庫・塩尻文庫目録』、『大原農書文庫・古医書集成目録』が刊行されました。各文庫の内容を簡単に紹介します。解説は目録解題の執筆者にお願いしました。

業合文庫

本目録は、岡山県邑久郡邑久町北島字上寺の業合家から寄贈された、幕末の国学者業合大枝の手沢本を中心とする和漢書507点、合わせて1230余冊からなる。大枝は上寺山の正八幡宮（現、豊原北島神社）の神主で、藤井高尚、及び平田篤胤に入門、香川景樹の歌学説に反駁を加えた『新学異見弁』（天保5年刊）の著者として知られ、『神代紀新釈』全15巻や、多くの詠草類を遺している。業合文庫の大半が神道・語学・歌学・古典文学に関する版本・写本類で占められているのは、大枝の学風を反映したものにはかならない。特に真淵・宣長・高尚・篤胤に関しては、その主要著作が完備しており、また大枝の書入本も少なくない。このような近世国学の一大宝庫が、このたび入念な整備を終えて、広く学内外の研究者に開放される運びとなったのはまことに喜ばしい。貴重な学術資料として業合文庫が大いに活用されることを願うものである。

（工藤 進思郎 文学部 教授）

大原農書文庫

岡山大学農業生物研究所が、前身の財団法人大原農業研究所から引き継いだもので、Pfeffer文庫、大原漢籍文庫とともに岡山大学大原文庫を構成する。大正10（1921）年代初めに蒐集された。782点2576冊で、内容は多岐にわたり、時代も幅広く、また漢籍、漢籍の和刻本もかなりあるが、近世期の農書、及び本草書が主体である。宮崎安貞の「農業全書」元禄10年版などの農書の基本的なものはかなり蒐集されている。また、これらのなかには、『国書総目録』に記載がないもの、掲載されながらも現物がないもの、或いはその数の少ないものなどもいくつかある。貴重な農書コレクションである。

研究に直接資する自然科学的な内外の雑誌・報告書類、関連文献とともに、このように漢籍、農書をも蒐集しているところに、この一民間研究所の農業科学研究における構想の豊かさを見る思いがする。

（神立 春樹 経済学部 教授）

塩尻文庫

昭和55年11月5日享年71歳をもって永眠された岡山県吉備郡真備町箭田所住の俳人塩尻青筋（本名 幾一）氏所蔵の俳書を中心とするコレクションが今般夫人富士子氏の好意により、一括して岡山大学に寄贈された。それが塩尻文庫と命名され、文庫目録も完成し、一般の利用に供されるようになったことは喜ばしき限りである。塩尻氏は、岡山県の高等学校教諭を歴任、そのかわら、飯田蛇笏、及び龍太に師事して俳誌『天山』を主宰し、日本の俳壇に大きな足跡を残した。氏はまた実作に加えて、芭蕉を中心とする俳諧史を研究し、『岡山の俳句』及び『岡山の芭蕉句碑』などの著がある。蔵書の内容は、古俳書74点、新書832点である。古俳書のうちには、『おくのはそ道』『芭蕉七部集』など日本の代表的な俳書のほか、吉備俳壇史をうかがうのに役立つ郷土資料が多数含まれる。また、新書のうちには、飯田蛇笏・龍太関係の俳句集を中心に多数の現代俳句に関する書物が蔵される。

（赤羽 学 文学部 教授）

古医書集成

岡山大学附属図書館鹿田分館に所蔵され、このたびこの目録に収録した古医書集成は、古い医学書を主体として、理学書、オランダ語医書、その他の和書から成り、主として、①岡山藩医学館、そしてこれを引き継いだ岡山県病院、岡山県公立病院、岡山県医学校において購入し、使用された書籍、②倉敷の蘭方医、妹尾又玄の旧蔵書、③美濃国の蘭方医、田口鳳介の旧蔵書、④都窪郡久米（現総社市）の蘭方医、山田成器の旧蔵書、⑤岡山市赤沢乾一の旧蔵書で構成されている。その他⑥医学部眼科学教室、及び小児科学教室には、それぞれその専門領域の古医書が収蔵されているが、明治末期、及び大正期にその当時の教授によって購入、或いは寄贈されたものである。

（中山 沃 医学部 教授）

研究集会・講習会参加記

中国・四国地区大学図書館研究集会に参加して

第27回の標記の研究集会が、岡山大学を当番館に、岡山市内および周辺の数大学の協力を得て、61年11月12日から3日間、国公私立の35大学から、58名の参加を得て行われた。

第1日は開会式に続いて、2つの講演、4つの研究発表と「ブラウジングコーナー」があった。

講演は、学術情報センター宮澤助教授による「学術情報センターシステムについて」と岡山大学阿部教授による「著作権法について」で、いずれも私達の当面の最大関心事であり、両講師ともシステムまたは法案作成の立役者であったことから、内容は歯切れのよいものであった。

研究発表は、IFLAの報告とパソコン等を用いた業務の合理化の3つの実情報告であった。私のように少し古い世代にとって電算化とは、なんだか怖い、またはほど遠いものであったが、まるで電卓でも使うように身近にパソコン等を利用され、それが業務の合理化・迅速化をもたらし、利用者に対するサービスの向上につながっていることを知り、認識を改めるに十分のものであった。

続く「ブラウジングコーナー」は新人コーナーで、若い方3人が日常業務に対する感想を述べられた。若い方々が、日々の図書館業務に問題意識を持ち工夫をこらしながら、真剣に取り組んでおられる姿には教えられるものが多かった。

第2日は、第1分科会「学術情報センターシステムと目録業務」、第2分科会「大学図書館の一般公開。学術情報システムにおける選書」と分かれて、情報の交換と討論を行った。

第3日は見学であった。見学先は岡山大学中央館のみであったが、岡山大学図書館の現状と将来計画の説明に対して、参加者の強い関心が示された。最近はこの見学が軽視されているのではなからうか。図書館業務には、全ての館で適用されるべき、合理的で最適なルール・手順が確立されているわけではない。私達の、固定観念にとらわれない、日々の創意工夫と発想の転換が求められているわけである。当番館およびその周辺の大学図書館が、館単位あるいは係単位で、その目玉的業務のPRを行い、見学者を募り、関心のある人々と話し合う機会が得られたら、それもまた研究発表または分科会となり得るのではなからうか。

(宮 明治 整理課 目録係長)

昭和61年度大学図書館職員講習会に参加して

講習会は去る11月17日から20日まで、西日本地区は京都大学を会場として、国公私立大学から、約90名が参加して行われた。

講義の内容は、初日が「大学図書館の使命」「学術情報センターと大学図書館」「中国語文献のデータベース化」、2日目が「学術情報センターシステム」「学術情報センターにおけるデータベースの形成と運用」、3日目が「学術情報流通の国際的動向」「外国雑誌センターの活動」「大学図書館業務電算化の実際」、4日目が「紙の劣化・複写に関する著作権の問題」「参考業務の実際」で、その他、「共同討議」「京都大学東洋学文献センターと京都大学図書館の見学」であった。

学術情報センターの先生方から、学術情報システムに関する講義を聞き、現在、着々と構築されている学術情報ネットワークの中で、身近に迫っているセンターとの接続をひかえ、身の引締まる思いがした。

千原秀昭阪大教授の、全文データベース(CJACSなど)や、Wiley、Elsevierなどが、電子出版を行い、冊子体が副産物として作られるという話などを聞くと、図書館もいろいろな対応が迫られているように思われた。

共同討議は「図書館業務電算化に係わる諸問題について」というテーマで、参加者を10班に分けて行われた。班の構成員が国公私立と多彩で、電算化についても各大学の事情が違ったので、現在学術情報センターと接続している大学の参加者の話を中心に討議した。状況説明に、熱心な質問が飛び、時間をオーバーする程であった。この共同討議で、班の司会をする機会を与えられたことは非常によい経験と勉強になった。

文献資料の質量もさることながら、占き良き時代の東洋学文献センターの建物、効率的、機能的に良く整備され、細かなところまで配慮された、昭和58年に完成した京大図書館、両所の見学は随所に目を奪われた。

4日間という日程に、盛り沢山の講義ではあったが、最新の情報に触れ、図書館の様々な問題を考え、日頃顔を合わすことのない参加者達と交わられたことは、大変有意義であった。これを今後の仕事をする上での糧とした。

(脇本 敏郎 鹿田分館 整理係)

雑 誌 係

雑誌係の業務は、国内外で出版される雑誌（逐次刊行物）を研究者、学生等の利用者に学術研究用として供する目的でなされます。雑誌は国内誌と外国誌とに区分され、国内誌には、和文誌と国内欧文誌とがあります。校費で購入するものと寄贈交換によるものとに分かれます。

昭和61年度現在、国内誌（3,909種：内購入1,088種）、外国誌（2,341種：内購入1,796種）

I. 購入和洋雑誌について

<年間業務の流れ>

①選定→②予約→③発注→④契約→⑤精算

①選定：例年6月に次年度の選定用リストを学内に配布し、新規購入・中止等の意向を確認します。

②予約：夏休みあけに上記リストを回収し、発注できるよう準備します。

③発注：10月初め、書店に一括注文します。

④契約：年度初め（4月）、外国誌と国内誌の契約を結びます。

⑤精算：2月末（外国誌）、3月末（国内誌）に雑誌入荷状況を見て必要な場合決算します。

<受付業務>

国内誌はマニュアルで受付作業を行い、外国雑誌は電算機で入力した後、各学部へ配布します。未着・欠号があれば、この時点で取り扱い書店に早急な納入を催促します。

II. 寄贈交換誌について

各大学で発行される和洋紀要や、海外から送られてくる交換寄贈雑誌は、図書館でまとめて受入をし、各学部へ配布されます。

III. 製本について

合冊製本することにより、利用の便宜を計り、また、紛失散逸を防ぎます。年度末は、製本業者が多忙なため、平常より納期が長くなりますのでこの時期の製本にはご注意ください。なお校費で製本をされる場合は、まず、雑誌係へご連絡

ください。（内297・841）

IV. 利用者サービスについて

中央館では書庫1階が雑誌の所蔵場所で、分類順に配架されています。

①全学的に利用の多い自然科学系外国雑誌（物理・化学・生物）は、中央館の自然科学コーナーに集中配架し、共同利用できるようにしております。これらの雑誌は、新着号のコンテンツサービスをしてあります。希望があればお申し込みください。（ただし、校費のみ受付）

②学内の雑誌所蔵状況は、国内誌・外国誌ともに、雑誌係前（1階閲覧室）の雑誌ビジブルを検索すればわかります。（和洋別、アルファベット順に配列）外国誌の中でロシア雑誌は別のファイルに、中国誌は国内誌のファイルの中にあります。また、最新一年間の所蔵データは、雑誌係にお尋ねください。最新情報をオンラインで検索いたします。

③他の大学にある雑誌の所蔵状況は「学術雑誌総合目録和文編1982年版」「学術雑誌総合目録自然科学編1979年版」「学術雑誌総合目録補遺版1982年版」「学術雑誌総合目録人文社会科学編1980年版」によって知ることが出来ます。これらの二次資料はどれも雑誌係前の検索コーナーと2階の参考調査係カウンターに備え付けてありますのでどうぞご利用ください。

このように雑誌係は、①予約・発注・受付・督促・支払・製本など：雑誌業務処理システム、②利用者のための書誌・所在・新着受入情報：雑誌情報検索システムの2つの構想を実現するために逐次前進しています。本年度、図書館専用電算機導入決定のおりから、今後は分館も含めた雑誌のハウスキーピング業務のネットワークを進め、さらに近い将来には、中央の学術情報センターと結んで、より良い利用者サービスを計る予定であります。

日 誌

- 61.11.27～28 第13回中国四国地区国立大学附属図書館協議会及び同係長会（於 広島厚生年金会館）
- 61.12.19 昭和61年度（第3回）附属図書館運営委員会
- 62.1.29～30 昭和61年度国立大学附属図書館事務部長会議（於 山口大学）
- 62.3.20 昭和61年度（第4回）附属図書館運営委員会

<カット> 農学部教授 奥 八郎 <題字> 附属図書館長 久留島 陽三

岡山大学附属図書館報 楷 No.4 昭和62年4月

編集・発行 岡山大学附属図書館 〒700岡山市津島中3丁目1-1 電話0862-52-1111内線286